粕谷裕子著

『比較政治学』

ミネルヴァ書房　2014年　vii+269ページ

鷲田任邦（わしだ ひでくに）

比較政治学は，ここ10年程で大きく変化した。現実の変化を反映して新たな研究分野が広がっただけでなく，細分化された研究対象について，多様化・精緻化した方法論を用いた実証研究が急速な勢いで蓄積されている。一方で，日本における比較政治学の主要な教科書は，5〜10年以上前に書かれており，現在展開しているダイナミズムを捉える上で十分とはいえない。本書は，国内外で精力的に研究活動を行う著者が(注1)，2004年以降，慶應義塾大学で「比較政治学を教えること」と向き合ってきた成果であり，まさにそのギャップを埋めるものとなっている。近年の研究動向や国内外の教科書の潮流を踏まえ，既刊の邦語教科書がカバーしていないテーマも多く盛り込んでいる。邦語教科書が扱ってきたテーマであっても，近年の枠組みの改変や知見の更新を把握する意義は大きく，新しい教科書・参考書として広く活用が期待される。

本書は，主要領域における成果が効果的に配置されており，初学者でも論争を追体験しながら基礎から最新動向までを学ぶことができる。同時に，専門領域を持つ研究者や大学院生にとっても，専門外の研究動向を把握し，今後の研究を展望する上で有益な情報を含んでいる。脚注と参考文献を豊富に盛り込み（2004年以降の文献が半数近くを占める），近年構築が進む公開データも数多く紹介している。研究対象の細分化が進むなか，領域横断的な理解と対話を促進する意義は大きい。

序章ではまず，隣接分野（政治思想・国際関係論・地域研究）と対比しつつ，比較政治学を，主に国内政治の個別具体的な現象の背景にある一般的な因果関係を，実証分析の積み重ねによって解明する（＝理論を構築する）営為として位置づける。続く本編では，近年邦語でも良書が充実する方法論を大胆に省く一方，幅広いテーマについて3部（各4章）に分けて解説している。

第Ⅰ部「国家と社会」では，⑴国家建設，⑵市民社会，⑶ナショナリズム，⑷内戦に着目し，国内政治が展開される基盤となる国家や秩序に関する研究を解説している。主に開発分野で扱われてきた内戦は，比較政治学の観点からの知見蓄積が著しいテーマである。第Ⅱ部「政治体制」では，⑸政治体制としての民主主義，⑹民主化，⑺民主主義体制と政治文化，⑻権威主義体制の持続（と多様性）を扱い，政治体制の在り方や変動を規定する要因や帰結に関する議論を紹介している。民主化研究の最新動向だけでなく，ここ10年程の「成長産業」である権威主義体制の持続と多様性に章を充てている意義は大きい(注2)。第Ⅲ部「民主主義の多様性」では，主に民主制に焦点を絞り，⑼選挙制度，⑽政党と政党システム，⑾執行府・議会関係，⑿福祉国家について，政策過程に留まらない幅広い視点から近年の研究を紹介している。

本書は，「日本を拠点とする研究者が新しい理論を作って世界に発信する流れを加速する」ことを企図して書かれたものであり，日本の比較政治学研究の裾野拡大に寄与すると考えられる。今回扱わなかったテーマも含め，今後も比較政治学の歩みとともに更新・増補されていくことを期待したい。

（注１）近年では，単著 *Presidential Bandwagon: Parties and Party Systems in the Philippines* (Tokyo: Keio University Press, 2008 & Manila: Anvil Publishing, 2009)，編著『アジアにおける大統領の比較政治学――憲法構造と政党政治からのアプローチ――』（ミネルヴァ書房，2010年，Palgrave Macmillan から英訳あり），翻訳『民主主義対民主主義（原著第２版）――多数決型とコンセンサス型の36カ国比較研究――』（ミネルヴァ書房，2014年，アレンド・レイプハルト著，菊池啓一との共訳）等があり，*Electoral Studies* や *Party Politics* 等の海外誌でも論文を発表している。

（注２）近年の海外の主要な教科書やハンドブックでも，欠かせないテーマとなっている。邦語では，『アジア経済』特集号「権威主義体制における議会と選挙の役割」（第54巻第４号，2013年）や久保慶一・河野勝編『民主化と選挙の比較政治学――変革期の制度形成とその帰結――』（勁草書房，2013年）等の論文集が刊行されている。

（早稲田大学アジア太平洋研究センター助手）